

重症心身障害者の受診支援

大阪市急病時、病院を仲介

重度の知的障害と身体障害がある「重症心身障害者」が、急病時にスムーズに医療機関で受診できるように仲介する大阪市の「医療コーディネート事業」が6月、スタートした。障害者の診察には専門知識が必要なため急病時にたらい回しにされがちな状況を踏まえ、大阪市内の拠点施設に常駐する専門の医師らが病状にあわせて搬送先の医療機関を斡旋することともに、医療機関を対象に研修も実施する。障害者の事前登録を受け付けた上で、10月から運用を本格化させる。

＝29面に「たらい回しなくして」

重症心身障害者は言葉が不自由で症状を十分に伝えられないことから、診療の難しさが指摘されている。障害者の保護者による



重症心身障害者 重度の知的障害と重度の肢体不自由が重複している障害者。重度の目安は、知的障害者が取得する療育手帳でA判定とされ、身体障害者手帳では1級または2級の区分とされる。先天的に障害があるケースがほとんどで、会話による意思疎通が難しい。車いすや寝たきりの状態で生活を送り、人工呼吸器が必要な人もいる。

から症状を聞き出せずに転院を促すケースがある。また、姿勢の変化などをきっかけに呼吸が困難になり、体が硬直したりする特有の症状が出た際、経験の乏しい医師や看護師では対応できないこともあるという。

厚生労働省によると、全国に約4万3千人いるという専門家の推計もあり、受

け皿となる医療機関の充実が急務となっている。対象となる大阪市在住の障害者は約2千人で今回の事業は全国的にも珍しいという。

事業を受託した大阪発達総合療育センターの重症心身障害者向け入所施設「フエニックス」（東住吉区）に窓口があり、利用を希望する障害者の保護者らは事前に障害や持病などを登録。急病時に窓口につながる。入れると、常駐する専門の医師と看護師が対応し、病状や事前登録の内容を踏まえて医療機関を仲介する。本格運用に向けて7月以降、協力の意向を示している医療機関向けの研修会を開き、重症心身障害者への診察方法などについて指導するなど、医療機関側の充実も図っていく。

どん底の苦しみに光

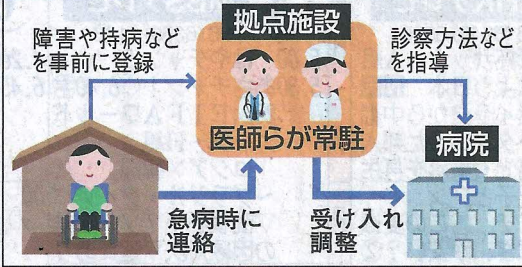
「病院たらい回しなくして」

重症心身障害者

「どん底」の暗闇に苦しんだ重症心身障害者とその保護者に「一条の光が差し始めた。大阪市が重症心身障害者を対象に、緊急時の医療機関の仲介を行う医療コーディネート事業。これまで専門的ケアが必要な障害者が医療機関を「たらい回し」にされ、保護者が絶望的な気持ちになるケースは多く、保護者の間ではスムーズな受け入れへの期待が高まる。専門家も「大阪市が実績を挙げてくれれば先例となって全国に広がる可能性もあり、意義は大きい」と評価する。

(清宮真一)
—1面参照

大阪市の医療コーディネート事業のイメージ



普段はこよやかな車いすの女性(50)が言葉にならない声を上げ、緊張した表情を見せた。2月14日午後5時半ごろ、大阪市阿倍野区の障害福祉施設「四天王寺さんめい苑」が運営するグループホーム。そばにいた職員は、車いすの背もたれに備え付けられた端末機を渡した。

女性の小指が端末機のボタンを押す。「い」「た」「い」。音声とともに画面



母親の語りかけに笑顔でこたえる重症心身障害者の女性(右)。大阪市のサポート事業に期待が寄せられている—大阪市阿倍野区(安元雄太撮影)

に文字が並ぶ。女性は胸のあたりを手で押さえた。「胸、痛いのか?」。職員の問いかけに女性は足首を曲げた。日頃のルールで足首を曲げれば「はい」、伸ばしたままなら「いいえ」。

午後6時過ぎには救急車が到着したが、複数の病院が搬送を拒否。堺市内の病院への搬送が決まったのは、約1時間後の午後7時過ぎだった。

心電図やレントゲン撮影などが行われ、診察は午後10時ごろ終了。原因は分からなかったが、症状は治まった。だが女性の母親(75)は不安をもちます。

「娘は直接、不調を訴えられない。周囲が異変に気づいたときは、病状が進行してしまっている可能性もある。そんな中でまた、たらい回しになったら…」

3時間待ちの末に

自宅で車いすの生活を送り、昼間はさんめい苑に通う男性(34)は数年前、大阪市内の自宅で38度5分の熱に見舞われた。母親は男性を連れ、自宅近くの総合病院に駆け込んだ。

男性は脳性まひで両手足に障害を抱えていた。首がすわらず、てんかんの持病もあった。

外来では一般患者にまじって約3時間待ち続け、診察室に入ったときには熱は40度3分にまで上がっていた。そこで医師から発せられた「宣告」に母親は言葉を失った。

「こつという障害がある人をうちでは診られない。入院もさせられない」

医師の紹介で堺市内の病院へ。男性は肺炎を起こし入院した。母親はこのと

き、悲壮な決意をした。「誰も頼れない。普段から自分で受け入れてくれる病院を探さないと」

天国と地獄の違い

さんめい苑を利用する保護者ら約50人は親の会をつくり、不安や悩みを相談し合っている。会長の森田靖子さん(69)は大阪市都島区にも、障害がある長男(34)の母親だ。

「緊急時に病院に断られたときは、まさにどん底。かかりつけの病院をつくっても、夜間に担当医が不在なら受け入れてもらえない。こんな思いは二度としない」

10月から本格的に始まる大阪市の事業。森田さんは今の心境を打ち明けた。

「これまでは病院に受け入れを断られ、もがいてきた。その必要がなくなるなら、大げさな言い方ではなく、天国と地獄ほどの違いがある」

堺市立重症心身障害者(児)支援センターの児玉和夫センター長は「緊急時にどれだけコーディネーターが発揮できるかがカギ。重症心身障害者への支援の必要性を感じている自治体は少なくなく、大阪市の事業が全国の先例になってほしい」と期待した。